

を上る勾欄式の階段で、其の親柱には唐金の擬寶珠がつけてある。

此の建築を様式の方から見ると、大體は和洋折衷であるが、外の格好は寧ろ日本風である、即ち屋根は殆んど日本風で、壁、窓等が西洋風になつてゐる。内部は寧ろ西洋風であるが、廊下の上の方に出てゐる肘木とか、階段の勾欄とか、又講堂、來賓室等は日本風である。殊に玄關は日本風が主である。併しこれらの日本風たるや、細部についてみると殆んど各時代の特色を持つてゐる。先づ柱にエンタシスのある事や、肘木の雲形なのは飛鳥時代、玄關の柱脚にある蓮瓣は藤原時代、勾欄の擬寶珠、講堂の柱脚は鎌倉時代、殊に柱脚は禪宗風を帶び、虹梁の袖切や、大瓶束は天竺様である。又墓股の彫刻は桃山時代或は徳川時代の特色を持つてゐる。かく數へ來ると、殆んど各時代の特色を各所に供へ、一口に日本風と云つても、何時代の様式だときめる事は出來ない。云はゞ各時代の特色を各所に配した一種新しい綜合的様式である。而して其の多種多様な特色は、まづ大體に於いて大なる破綻なく綜合調和されてゐるやうである。

斯る折衷式、寧ろ日本風を主とした公共建築は明治の初年から少しづつ試みられてゐる。余の記憶に浮び來るものを擧げて、長野學士の奈良縣廳、關野博士の奈良縣物産陳列場、武田學士の勸業銀行等がやゝ古く、近頃に至つては歌舞伎座、白木屋、泰文社等がある。併しこの主義の建築は何れかと云へば物ずきにやつたもので、眞面目に研究して、此の系統を發展させやうと考へた事はないらしく、従つて數も少なく發達もしなかつた、若しもう

少し眞面目に此の主義に没頭する建築家があつたらもつと發達したに違ひない。しかも建築の性質と位置とによつては、かゝる様式のものも頗る面白いと思ふ。余は泰文社については建築の性質としてはいゝが、位置の上からは許せないと云つたが、美術學校の場合は、建築の性質からも位置からも十分許せると思ふ。否な木造とするならば、最も面白い様式の撰擇であつたと信ずる。しかも從來これ程各時代の特色を集め、それが破綻なく調和して、一種の新しい表現を作つたものは無かつた。一つの細部を離して見れば飛鳥とか藤原とか古いものでも、かく一緒に集めた時は一種新しい感じが出る。しかも全然新しい生のものと違つて、各々其の時代に洗^{リフアイン}練されたものであるから、落付いた垢拔のした所がある。勿論中には失敗した細部、或はもう一層よく設計される餘地ある點もあるが、それは小さな缺點である。

要するに大體に於いて斯る様式をとる事に決した正木氏と、二百分の一の圖を引いた古宇田氏の計畫と其の後の設計、監督をした鳥海氏の意匠とが、相待つて斯る面白い新建築を作り出したので、大正時代の建築史の第一頁に特記さるべきものだと思ふ。

(六月十一日)

『美術新報』第十二卷第九号。大正二年七月一日)

④ 開校滿二十五年紀念式その他

大正三年四月二日、開校滿二十五年紀念の式典が行われ、併せて種々の紀念行事が催された。これは本年が本校の授業開始(明治二十年)より二十五年目に当たり、また、一連の改築工事も完成した

ので、それを記念して開催されたもので、その様子は『東京美術学校校友会月報』第十三巻第五号「開校満二十五年記念号」に逐一記録されている。今回は正木直彦校長の「而して又十五年記念の際舉行したる美術祭の如きは、催しとしては再びすることは難く、且當時とは時勢も違ふを以て可成実績の擧がるべきことをなさんとする考なれば、其邊のことをも含まれ、以て御協議を願はんと欲す。」（同誌所載大正三年六月十八日第一回協議会正木演説）という致命により、準備怠りなく、整然と行事が行われた。

一、記念式典

四月二日、講堂において来賓、職員、生徒六百余名列席のもとに次の順序で行われた。

○開校満二十五年記念および新築披露の辞（正木学校長）

○新築工事報告（柴垣文部省建築課長）

建築関係者へ正木学校長より記念品（目録）贈呈。鳥海他郎へ
鑄造西蔵式水瓶、久留中へ同野薔薇模様花瓶、大堀丑太郎へ
同黄銅製花瓶、近延大八へ同野分模様花瓶、伊藤直光へ同獅子鈕四つ耳香炉、鈴木生熊へ同花模様花瓶。

○勤続満二十五年諸氏表彰祝賀の辞（正木学校長）

黒田清輝祝賀会係長より高村光雲、竹内久一、小島憲之へ
記念品目録贈呈。高村光雲謝辞。

○故橋本雅邦、川端玉章銅像建設披露

発起人総代白井雨山（雅邦銅像）、福井江亭（玉章銅像）報告。本校へ寄附。雅邦銅像は白井雨山原型。一度桜岡三四郎が鑄造したが、原安民があらためて鑄造したもの。玉章銅像は武石

弘三郎原型、大峽武司鑄造。

○式終了挨拶および卒業生による卒業生倶楽部新築に関する報告（正木学校長）

終了後茶菓饗応、卒業制作および文庫収蔵品陳列場随意観覧。

二、記念展覧会

四月二日より同月五日まで新築美術部校舎および新築煉瓦造教室に新旧卒業制作と文庫収蔵参考品計九〇四点を展示。

三、勤続満二十五年諸氏の祝賀会

四月四日、精養軒で本校職員全員で開催。夕刻、四望燈々として銀世界と化し興を添える。正木直彦、大村西崖演説。白浜徹の三氏略歴紹介。高村光雲謝辞。

四、記念図書刊行

一、『東京美術学校記念会展観目録』
創立二十五年記念会

写真版二十葉、出品目録五十九頁。四六判。審美書院印刷。記念式当日招待者に配布。なお、審美書院は右の出品目録のみを別刷りして発売した。

二、『東京美術学校蔵品目録』

東京美術学校編輯。大正三年四月三日。審美書院。緒言（正木直彦）、目次（大村西崖による略解説を附す）、コピータイプ図版八十四から成る大版図録。

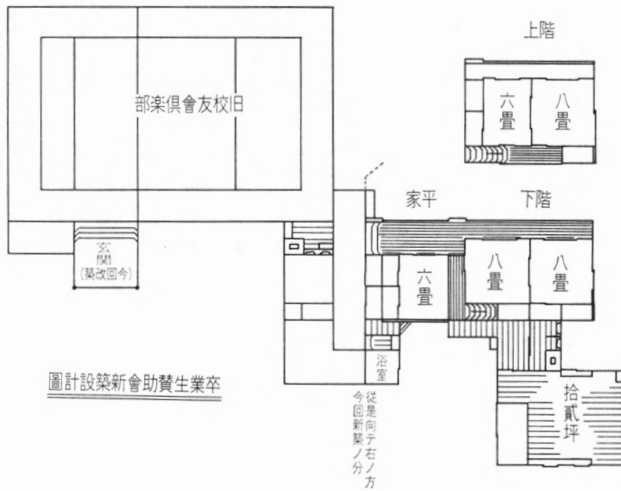
これらの外に審美書院は本校蔵品二十種の絵葉書を展覧会中構内で発売。

五、卒業生倶楽部の記念新築

旧校友会倶楽部に接続して瓦葺二階建一棟、付属室二棟から成る卒業生倶楽部が新築された。これは開校満二十五年記念式に際し卒業生にして本校に在職する者三十名（白井雨山、和田英作らが中心）が他の卒業生たちに呼びかけて卒業生賛助会を作り、寄附金を集めて建設したもので、集会娯楽、地方在住卒業生の宿泊所等に使用されることになり、彫刻撰科卒業生後藤良がここに居住して管理することとなった。

六、旧校友会倶楽部の修飾

旧校友会倶楽部は総檜造り約百坪の建物で、ピゲロウが桜井敬



『東京美術学校校友会月報』第13巻第5号より。

徳阿闍梨のために建てたものを明治二十四年に岡倉寛三が本校校友会のために譲り受けて移築し、日本青年絵画協会第一回展をはじめとして多くの展覧会が開かれた由緒ある施設であるが、明治三十四年一月に至って校友会はこれを本校に寄附。以後会議室と称された。校友会は今回の式典に際して卒業生賛助会と提携し、校友会積立金より千五百円を支出して玄関を改造し、欄間を作り、格天井を張り、建具の不足を新調し、畳を入れ、敷物を敷き、電灯を備えるなどした。

七、記念植樹会

本校会計掛（主任高田松男）の発起により起こった会で、その呼びかけにより国内国外の職員や卒業生たちから樹木の苗や金員が送られ、校内各所に桜、檜、杉、樅、銀杏、桐等の苗木が植え込まれ、緑豊かな景観を呈することとなった。大正三年四月より同五年三月までの同会事業報告は『東京美術学校校友会月報』第十五巻第一号に同年四月より大正八年三月までについては同誌第十八巻第二号に掲載されており、購入樹木の種類、寄贈者、植付場所等々が詳しく記されている。

⑤ 岩村透の外遊（辞職、死去）

岩村透は明治三年一月二十五日東京生まれ。父は岩村高俊。岩村通俊、林有造を伯父に持つ権門の出身で明治三十九年に男爵となった。はじめ慶応義塾幼稚舎、同人社予科、青山英和学校で学び、明治二十一年渡米してキングストン市ワイオミング・セミナー美術科、ニューヨーク市ナショナル・アカデミー・オブ・デザイン等で